Alula, No.38(2009 年春号):30-37

鳥類標識調査と「足環物語」

須川　恒

どこに飛んでいくか判らない鳥に足環をつけるという作業は、なかなか奇妙な作業である。その鳥を見つけた人、その人がいる世界と思わぬつながりができるきっかけになるかもしれない。この奇妙さを大切にしたいと思って、私は今までに「足環物語」とタイトルにつけた文をいくつか書き、私がかかわった数種の鳥の渡り解明につながった標識調査について紹介した。さらに、他の方が書いた文でも、これはみごとな足環物語だと感じたものもある。そういった物語を通して一般の人々やバーダー、さらにバンダーに、どういった物語を伝えたかったのかをまとめて紹介しておきたい。今後とも多くのバンダーがさまざまな「足環物語」を書く勧めとしてである。

足環物語を書くことになったきっかけ

1983 年に「ローム君の京都博物日記」という本が出版された。京都の企業の貢献として、府内の多様な自然や文化歴史について紹介し、府内の多くの学校にこの本は寄贈された。冠島のオオミズナギドリなどとともに、京都の人々に関心の高いユリカモメについてもとりあげられていたが、一緒にユリカモメの標識調査をしていた大槻史郎様ともども、私がとても納得できなかったことがあった。「ユリカモメはアリューシャンからのお客さま」と書かれていたことである。それまでの数年間京都の鴨川で越冬しているユリカモメの繁殖地がロシア(当時ソ連)のカムチャツカだとつきとめ、いくつかの雑誌で紹介していたし、新聞でもしばしば報道されていた。この本の文中にはカムチャツカのことも触れているのだが、大きくタイトルになっているのは、根拠を聞いたこともないアリューシャンだった。さっそく、この本の編集をしている広報誌の制作会社の編集の方に連絡をとって、日本へやってくるユリカモメがアリューシャンで繁殖しているという根拠を聞いたところ、ある野鳥観察者がアラスカの探鳥旅行の際に聞いて思い込んだ話が出発点らしく、改訂の機会があれば直したいと言われた。

しばらくして、この編集担当の方から、２ヵ月に 1 回出る会社の広報誌への連載記事を一年分依頼された。私は 1970 年代末に鳥類標識調査の資格をとっていくつかの鳥種の標識調査にかかわってきた。標識調査活動は一般の方にはあまり知られておらず、また私がかかわった数年の間に、標識調査を通して、それまで全く不明であった鳥の渡りが解明されつつある体験をしていたので、ユリカモメの話からはじめて６回分の「足環物語」と題する一般向けの記事を書いた(須川,1985abcdef)。

ユリカモメからはじまった足環物語

古来から親しまれている冬鳥なのに、秋にどこから渡ってくるかと聞いても、ただ北の

国からとしか答えられなかった種がいくつもあった。ユリカモメがそうだったし、ヒシクイやマガンなどのガン類、九州に多数渡来するツル類だってそうだった。ところが、1980年代に入ってこれらの種の繁殖地情報が得られるようになった。私が足環物語として紹介したのは、ユリカモメ、ヒシクイ、マナヅルの渡り解明である。

最初に、ユリカモメの渡り解明ついて紹介した。冒頭には以下のように書いた。「鳥を捕まえて連絡先を記した足環をつけて放し、この鳥がたどり着いた地からの便りを待つのは、ビンの中に手紙を入れて海に流しあるいは風船に手紙をくくりつけて見知らぬ人からの手紙を待つ心情に通じるものがあろう。その期待はほとんどかなえられないものであるがゆえに、よけいに深く･･･」「捕まえた鳥に足環をつけ大空に放す一瞬にバンダー達が感じる気持ちは、手製の金属片に自らの住所を記して鳥の足に巻きつけて放した標識調査者の創始者達の心情と変わることはあるまい。･･･」。ユリカモメの物語は、私がつけた足環についての手紙を受け取ったわけではない。私のほうが、京都の鴨川にやってくるユリカモメに足環つけている誰かさんに向けて手紙を書いたのである。この手紙が、カムチャツカにいる標識者であるロシア人鳥類学者の手に届き、彼からの手紙を私が受けとることができたのが全てのはじまりだった。その詳細は後述する。

ヒシクイとマナヅルは、ユリカモメの渡り解明の副産物だった。ユリカモメで知り合ったカムチャツカの鳥類学者ニコライ･ゲラシモフ氏がヒシクイの捕獲できる場所を知っていたため、日本雁を保護する会とゲラシモフ氏との交流がはじまり、日本の雁類の渡り解明が進んだ(詳しくは,呉地 2006)。マナヅルのほうは、ゲラシモフ氏に会う目的で 1982 年にモスクワの国際鳥学会に参加した際に知り合ったモスクワ大学のスミレンスキー氏に働きかけ、彼が繁殖地でマナヅルの幼鳥に黄色い足環を装着し、鹿児島県出水のツル類の集団越冬地で確認され、日本ではじめて繁殖地がつきとめられた記録となったものである。

足環物語による標識調査の啓発

一般の人にはなじみの少ない標識調査の概要や意義を把握してもらう目的で、オオミズナギドリ、カシラダカ、ツバメの標識調査を紹介した。

オオミズナギドリは、京都府舞鶴市の冠島のコロニーで継続的に実施している標識調査であり、戦後長く連絡がなかった中国からの回収記録の第一号は、足環番号から冠島でオオミズナギドリの雛へ標識した個体だと判ったが、中国からの連絡はその足環がトウゾクカモメに装着されていたという謎に満ちたものだったという話である。

カシラダカは、福井県織田山にある一級ステーションの標識調査活動を紹介する目的で、当時標識数が一番多く(今ならアオジだが)、雌雄･成幼の区別などが判り易い種として紹介した。このステーションができた背景には、福井県でさかんだったカスミ網猟の密猟をやめさせるためにも、カスミ網を使った渡り研究を進めるという背景があった。ハンターとバンダーは、濁点がつくかつかないかだが、ハンターとバンダーがどう違うかを理解してもらうために以下のように書いた。「鳥に足環をつけるには、まず鳥を捕獲しなければなら

ない。鳥達の生息環境や習性を探り、いかにすれば有効に捕獲できるかとあれこれ試みる。うまく捕獲することに成功した時のバンダーの心情は、ハンターが獲物を得た時に感じる心情に通じるものがあろう。しかしバンダーがハンターと決定的に違うのは、足環をつけられた鳥が放鳥後もそれまでと変わりなく野外で生活を続けていくことができるように鳥を取り扱わねばならないという点である。」

ツバメは、一般の人があまり知らない夏から秋にかけての集団ねぐらという習性と、その習性を利用して進めている標識調査について紹介した。ツバメの渡りは 1960 年代の東アジアで広く行われた米国主導の渡り鳥調査によって基本的な解明がされていたが、現在でも標識調査を進めることが集団ねぐら地がある湿地の保護にもつながることを紹介した(詳しくは須川,1999)。

1986 年に「野鳥」誌に、ユリカモメを通して「鴨川とカムチャツカが結ばれた」物語を紹介する機会があり(須川,1986)、文の導入に当時の冷戦下の状況をふまえ、以下のように書いた。「毎冬渡ってくる冬鳥や春秋に通過する旅鳥とつきあっていると、どうしても彼らが子育てを行っている地域の様子を知りたくなってきます。日本にやって来る夏鳥については越冬地での生活を探りに南国へ追いかけていくということは可能かもしれません。しかし日本に渡来する冬鳥や旅鳥の故郷として重要なソ連極東部には自由に立ち入ることもできません。これらの地域は、日本で野鳥に関心を持つ人々にとっては暗黒地帯であるといっても過言ではないでしょう。越冬地だけでなく、繁殖地や渡り途中の様子を明らかにして初めて冬鳥の生活がわかったと言えるのです。鳥が過ごしているはずのもう半分の生活に触れたく望みつつも実現できずに無力感を感じている人も多いのではありませんか。」。これは、熱意をもったバーダーを標識調査の持つ可能性に誘うためのメッセージでもあった。

日本鳥類標識協会と足環物語

1986 年に日本鳥類標識協会が発足し、定期的に日本鳥類標識協会誌が刊行されるようになった。発足当時の協会誌には標識調査紀行や、標識調査にかかわるエッセーもよく掲載された。私も編集委員からの依頼もあり、何篇か足環物語を掲載した。掲載した種は、ユリカモメ、マナヅル、オオミズナギドリで、社報として書いた内容に、もう少し詳しく渡りが解明された経緯や時代背景がわかる情報を追加した(須川,1987ab,1988)。

日本鳥類標識協会誌の掲載文には英文タイトルが付記される。山階鳥類研究所(以下山階鳥研)鳥類標識研究室(以下標識室)の茂田良光さんは、「足環物語」を「The Road of the Rings(足環の道)」としてくれた。近年映画にもなった英国の作家トルキンの「指輪物語」の原題が「The Lord of the Rings(指輪の王)」であることのもじりだった。

今度はバンダー向けに「足環物語」を書くことになり、以下のようなことを書いた。「日本の周辺国では現在のところ標識調査はあまり盛んに行われていない。これが外国放鳥国内回収(その逆もだが)が少ない原因である。それだけに、もし外国で放鳥した鳥を発見する機会があれば、単に回収記録の一例としてしまわず、その足環に込められている標識者の

想いをくみ取って行くことが必要であろう。足環は、まだ見ぬ世界とつながりをつくる重要な糸口になる」。マナヅルについては、越冬地における給餌が原因と思われる越冬数の急増があったが、繁殖域の拡大があったのか、繁殖密度が増しているのかといったことは未解明で、「足環によって、繁殖地と越冬地が数本の線でつながったというだけに終わらず、越冬数がどのようなしくみで決まるのか国境を越えた協力関係で解明したいものである」と結んだ。

その後、バンダーニュースの中で、足環物語として、オオヒシクイ、オオジュリン、ユリカモメの記事を載せた(須川,1992abc)。1990 年代に入って、今まで不可能だったロシア極東部へ調査のために立ち入ることが可能となり、記事はそれらを反映している。

ロシアのカムチャツカで集団換羽地に集結するオオヒシクイに首環を装着するための日露共同調査が行われた。その時に 1987 年に琵琶湖までの飛来が初めて確認された標識鳥の一羽の「R15」を再捕獲したが、その首環には散弾の跡があり、オオヒシクイに銃猟問題があることを感じたという記事である。

また、雁への調査を終えてから、念願のユリカモメのコロニーを訪問し、赤いプラスティック足環を装着し、その冬に京都の鴨川など日本各地でカムチャツカ発のユリカモメが見つかったというニュースであった。

オオジュリンはリカバー情報の多い鳥だが、これはオオジュリンの主たる越冬地であるヨシ原が各地で危機的に減少していることを反映しているのではという記事を書いた。オオジュリンの標識率の高さは、1998 年秋に日本鳥類標識協会の共同調査として、カムチャツカで捕獲したわずか 19 羽の成鳥(日本における冬を経験している)の中に２羽も日本の足環をつけた個体を捕獲した際に痛感した(須川,1998)。

バンダーニュースには、足環物語とタイトルをつけるにふさわしい記事もある。北海道の高田勝さんの記事(高田,1992)では、テレビ局の取材でカムチャツカの奥深くについていった高田さんが、現地の狩猟者のベルトにつけられているきらりと光る狩猟の「お守り」をみつけた。これは番号から６年前に埼玉県でオナガガモに付けた足環だと判ったという話である。

足環物語と手紙のやりとり

今ならばそれほど話題にはならないが、1980 年代は足環物語の一つ一つの進展が結構注目された。ユリカモメのカムチャツカの標識者と連絡がついた時、彼が放した標識ユリカモメを鴨川で捕獲した時、やっと彼が日本を訪問することができて京都にもやってきた時、いずれも全国版の新聞のニュースとして紹介された。鉄のカーテンで情報が遮られている時代背景の中で、足環物語は注目される力を持っていた。やっと雪解けの時代がやってきて、ソ連からシュワルナゼ外相が来日し、当時の宇野外相と懸案になっていた日ソ渡り鳥条約の批准書を取り交わしたという新聞一面のニュースの下のコラム(読売新聞 1988 年 12 月 21 日編集手帳)では、ユリカモメの標識のルーツが解明された物語を紹介するととも

に、千年前の墨田川の船頭は都鳥を知らない都からの一行を笑った(伊勢物語)が、「渡り鳥の効果的保護をすすめ、須川さんらの期待にこたえないと千年前の船頭に笑われる」といったことが書かれていた。

単なる回収記録では物語にはそれほどの力はない。標識者をむすびつける手紙のやりとりがあって物語がうまれた。もっとも、鉄のカーテンの時代には、一つの手紙のやりとりにも多くの人々の協力が必要だった。ユリカモメを例に、具体的に紹介しよう。

1979 年２月 25 日に大阪府岸和田市久米田池のほとりで弱ったユリカモメの幼鳥にソ連製の P605800 の金属足環がついていたことが出発点だった。京都にユリカモメの会という子供会があって、指導している学生が英文でモスクワの標識センターに 1979 年４月 22 日に問い合わせる手紙を出したことに刺激された。彼らは正しい標識センターの住所を知らずに手紙を出していたので多分標識センターには手紙は着かないと思った。そこで私は、山階鳥研標識室にモスクワの標識センターの住所を尋ね、問い合わせの手紙を同年 6 月 7 日に出した。京都の鴨川でも多くのユリカモメの標識鳥が見つかっており、番号を読み取れる写真も何枚か撮影されていたからでもある(須川,2008)。モスクワの標識センターからは、岸和田で発見された個体はカムチャツカで標識したものだということを伝える６月 19 日付けの手紙を受け取ったが、私が問い合わせた、誰がカムチャツカで標識しているかという問に対する答えは待ってもやってこなかった。この件を、当時の標識室室長の吉井正氏に報告して、さらに相談したところ、この夏にハバロフスクで汎太平洋学術会議があって極東の鳥類研究者が集まる会議があり、カムチャツカからの参加者があれば聞いてみようと返事をいただいた。

その後、吉井氏からハバロフスクの会議にはカムチャツカからの参加者は来なかったと知らされたが、参加していたマガダンの北方生物問題研究所のコントリマビチャス所長の住所を教えていただいた。1979 年 12 月 12 日付けで、私から彼へ問い合わせの手紙を出している。しばらく返事は来なかったが、春になりコントリマビチャス氏より 1980 年４月２日付けの手紙を受け取った。「お返事を待たせて申し訳ありません。不幸なことに、私は標識者の情報を持っておらず、判明するのに時間がかかりました。1978 年ユリカモメに標識した人はカムチャツカのニコライ･ゲラシモフ様です。」と住所が書かれ「あなたの関心をお持ちの情報を得るために彼に連絡をされるとよいでしょう。ただし、彼は英語の手紙を書くことができないかもしれないので、もしあなたがロシア語が読めるならばその旨を彼に伝えるとよいでしょう。吉井さんによろしくおつたえください。」と書かれていた。この内容は私にとって幸いだった。大学で第２外国語にロシア語をとったものの、試験が通らなくて卒業間際まで勉強していた。大学を卒業して 10 年間全く必要なかったロシア語が役立ちそうだった。ロシア語の単語はほとんど覚えていないが辞書は持っていた。手紙を準備していたところ、５月８日に、カムチャツカのゲラシモフ様からロシア語で書かれた手紙を受け取った。

たくさん辞書で単語を調べないといけなかったが、以下のようなことが書いてあった。

「あなたの手紙を受け取り大変喜んでいます。残念なことに、あなたの手紙は何人もの人々の手を経て私のもとにやってきました。今後はすみやかなやりとりができるでしょう。1978 年、フラモビツキ湖のまわりのコロニーで助手に手伝ってもらって、1084 羽のユリカモメに標識をしました。あなたが部分的に観察された番号の足環は全て私が標識したものでしょう。ユリカモメはこの湖で、アジサシやコシジロアジサシとともに五千番いが営巣しています･･･」。それ以降、彼との手紙のやりとりは実にスムーズに行われ、繁殖地の様子がどんどん判ってきた。

最初の段階でお願いされたことがある。それは、日ソ渡り鳥条約が 1973 年に締結されたが、ゲラシモフ氏は、付属書としてあるべき、研究や保護をすべき両国の渡りをする鳥のリストを持っておらず入手できないかというものだった。私も持っていなかったが、吉井氏におねがいして送ってもらった。日ソ渡り鳥条約は、1973 年に田中角栄総理、大平正芳外相がモスクワを訪問して締結はしたものの領土問題がからむ種がネックとなって日本の国会で批准されていなかった。このような事情を書くとともに鳥のリストをゲラシモフ氏に送ったところ、人間の都合で渡り鳥の保護が進まないのは残念ですと返事が返ってきた。そんなわけで、日ソ渡り鳥条約がいつ批准されるか気にかかっていたのである。

「アリランの青い鳥」における手紙のやりとり

遠藤公男氏の動物文学の紹介(須川,2007)の中で、足環物語としては無視できない「アリランの青い鳥」(遠藤,1984)について紹介した。「アリランの青い鳥」は絶版で、読むことが困難な状況になっているので、ネタばれになるが、どのような手紙のやりとりがあったのかを紹介しておこう(講談社は「アリランの青い鳥」を文庫化でもしてぜひ再出版してほしい！)。

「アリランの青い鳥」には 1963 年 6 月 6 日に韓国の鳥類学者ウオン(元)・ピョンオー氏がシベリアムクドリに標識して、その回収がきっかけになって、朝鮮戦争で生き別れになっていた北朝鮮の著名な鳥類学者の父ウオン・ホング(洪九)氏と生存を確認しあうことができた物語が描かれている。

1960 年５月国際鳥類保護会議が東京で開催され、韓国からやってきた若きウォン･ピョンオー氏は、山階鳥研から金属足環をもらい、帰ったらつけるのが楽しみだと著者の遠藤氏に語る。1964 年５月山階鳥研は、国交のない北朝鮮からモスクワ経由の航空便を受け取る。そこには、ピョンヤンでシベリアムクドリに「農林省 JAPAN･C7655」の足環がついており、日本ではシベリアムクドリは繁殖していないはずで、大変不思議なので、いつどこで放したかを教えて欲しいと書かれていた。この足環は、ウォン･ピョンオー氏がソウルで巣箱で繁殖したシベリアムクドリの雛につけたものだった.

回収記録としては、シベリアムクドリでソウルとピョンヤンがつながった、これだけである。でも、物語はここからはじまる。

東京からの英文の返事をみた父のホング氏は、ウォン･ピョンオーという標識者が、生き

別れた自分の息子ではないかと思う。同姓同名かもしれないが、ピョンオーのオー(日偏に牛)という字を名前に使う人は極めて少なかった(ピョンは炳)。そこで、標識者の名前を漢字で教えて欲しいと重ねて山階鳥研に問い合わせる。山階鳥研は、どこまでもていねいで、もう一度、ソウルの農事院に漢字を問い合わせた。

山階鳥研からの手紙によって、動乱の中で分かれて十四年、息子が生きぬき、しかも鳥の研究者になったらしいということを知ったホング氏の喜びはいかほどだったか。1965年北朝鮮労働新聞は、ウォン･ホング氏と息子の劇的な巡りあいの物語を載せた。「親子をつないだシベリアムクドリ　手紙をつけてくれれば読むことができたのに･･･」という見出しがついていた。それはソ連の新聞プラウダに載り、世界的なニュースとなった。ニューヨークタイムズが書き、日本の新聞、最後に韓国の新聞が書き、世界を一周する大ニュースとなった。五百万とも一千万ともいわれるちりぢりになった家族のうちで、消息の判った第一号と言われる。世界の人々は朝鮮半島でおこっている悲劇をあらためて知った(状況は今だって基本的にかわっていない)。

ところで、遠藤氏は本の中で名前を特に挙げていないが、国交がなく直接の手紙の交換が許されない非常に困難な状況の中で、この父子をつなぐ役割をした親切な山階鳥研の所員は誰だったのだろうか。2007 年夏に冠島調査に参加した山階鳥研資料室長の鶴見みや古様に聞いたところ、やりとりをした具体的な手紙はまだ見つかっていないが、この仲立ちをしたのは研究所創立者の山階芳麿氏だと教えてもらった。「私の履歴書 13」(山階,1979)によると、山階氏は 1936 年朝鮮半島の採集旅行の際にピョンヤンの安州農林学校の先生をしていた鳥に詳しい元洪九氏に案内してもらっていた。「ところが朝鮮戦争のために父の元洪九は北に、息子のピョンオーは南にと離れ離れになってしまった。息子も鳥類学者となり、大学の教授として私の研究所に留学していたが、父子で直接文通することはできない。そこで私が親子の橋渡し役をすることになった。父が私の所に手紙をよこす。私はそれをそのまま送るわけにはいかないから、読んで差しさわりのないところを息子のところへ書き送った。息子もまた同様にする。朝鮮戦争直後から二十数年、ずっと橋渡し役を続けた。先般父の元洪九が亡くなり、ついに父子の対面はかなわなかった･･･」。

足環物語へのいざない

鳥の足環にちらちらと赤い糸が見える人は、ぜひたぐってみることを勧めたい。赤い糸をたぐると、どんな地域の、どのような人々の、どのような営みにつながっていくのか、私達の時代にどのような影響をもたらすのか、たぐりだす前に予感はあっても、予想はつかないものだが、たぐってみる価値はきっとあるにちがいない。

せっかく赤い糸が見えているのに「誰かがやってくれるだろう」と考えると、それはそこで止まってしまう。たぐるべき赤い糸はたくさんある。分担してたぐるしかない。たぐりだした人を手助けしてくれる人はきっとあらわれる。あたらしい世界が見えてくると、きっと人はその発見の物語を伝えたくなる。そんな物語を、みんな待っている。

文　献

今西錦司(総監修)(1983)ローム君の京都博物日記.ローム株式会社.
遠藤公男(1984)アリランの青い鳥．講談社.
呉地正行(2006)雁よ渡れ.どうぶつ社.
須川恒(1985a)足環物語　ユリカモメ．第一工業製薬社報 434 号:12-13.
須川恒(1985b)足環物語　カシラダカ．第一工業製薬社報 435 号:10-11.
須川恒(1985c)足環物語　オオミズナギドリ．第一工業製薬社報 436 号:10-11.
須川恒(1985d)足環物語　マナヅル．第一工業製薬社報 437 号:14-15.
須川恒(1985e)足環物語　ツバメ．第一工業製薬社報 438 号:10-11.
須川恒(1985f)足環物語　ヒシクイ．第一工業製薬社報 434 号:10-11.
須川恒(1986)ユリカモメの繁殖地を探して，鴨川とカムチャツカが結ばれた.
野鳥 1986 年 11 月号:18-19.
須川恒(1987a)足環物語(1)　ユリカモメ．日本鳥類標識協会誌,2:50-52.
須川恒(1987b)足環物語(2)　オオミズナギドリ．日本鳥類標識協会誌,2:71-73.
須川恒(1988)足環物語(3)　マナヅル．日本鳥類標識協会誌,3:42-43.
須川恒(1992a)足環物語　オオヒシクイ「R15」の旅．日本鳥類標識協会バンダーニュース No.2:9.
須川恒(1992b)足環物語　オオジュリンを通して知るアシ原の危機．日本鳥類標識協会バンダーニュース No.2:9-10.
須川恒(1992c)足環物語　ついに見つかったアルファベット２文字のユリカモメ．日本鳥類標識協会バンダーニュース No.2:10.
須川恒(1998)カムチャツカにおける日露共同標識調査の概要速報．日本鳥類標識協会バンダーニュース No.16:5-6.
須川恒(1999)ツバメの集団塒地となるヨシ原の重要性.関西自然保護機構会報 21 巻２号(通算 38 号):187-200.
須川恒(2007)動物文学者遠藤公男の世界.ALULA(No.34,2007 春号):32-37.
須川恒(2008)ユリカモメの渡り研究で見えてきた標識調査の連携関係．ALULA (No.36,2008 春号):38-49.
高田勝(1992)ある「お守り」～カムチャツカの山深くでの話～.バンダーニュース,No.4:2-9.
山階芳麿(1979)私の履歴書 13.日本経済新聞連載記事(山階鳥研ホームページ「読み物コーナー」に掲載).

(本文を掲載した Alula 誌は、西日本を中心とする鳥類標識調査者(バンダー)の情報共有誌です。Alula は鳥の小翼羽のことです。

本文は Alula 掲載文を少し手直ししてあります。

2009 年５月 26 日　　須川恒　連絡先:　cxd00117@nifty.ne.jp)